

北海道農業の未来を拓く広報誌

HAL だより

Hokkaido Agricultural Laboratory
for Business Development



新たな事業体制について

HALのこと、農業のこと、北海道のこと

HAL財団 理事長 磯田 憲一

これからHAL財団が向かう先

HAL財団 専務理事 沓澤 隆

The fellowship

農業経営モデル紹介

株式会社いただきますカンパニー 代表取締役 井田美美子氏



<http://www.hal.or.jp>

新たな事業体制について

HALのこと、農業のこと、北海道のこと

HAL財団 理事長 磯田 憲一



2013年、新公益法人制度に基づき「一般財団法人」に移行しましたが、消費者が求める「安心・安全」に応え、また環境負荷の低減や農業経営リスクの管理を徹底するため、農産物生産に関する統一基準「HAL認証農産物」認証制度を定め、農業の企業的活動に役立つよう、一層実践的な活動に取り組んできました。

こうした方向性に共感・共鳴する農業者が集うHAL認証農産物協議会は、百数十名が参加するまでになり、農業生産工程管理の国際規格であるGLOBALG.A.P.のグループ認証取得数では日本トップのメンバー数を数えるまでにになりました。

2020年を迎え財団活動も17年目に入りましたが、HAL財団のこれまでの活動に着目した企業から、HAL認証農産物制度の仕組みをさらに発展させ、農業ビジネスとして本格的な展開を図るため、新たな事業体を設立したいとの提案をいただきました。私たちが実証実験的に取り組んできた、独自認証制度に基づく生産、流通、販売の仕組みを、さらに本格的な事業体として進化した形に発展させる方向性は、私たちの本旨に沿うものであり、HAL財団も共同出資して設立する事業体に事業移行することで基本合意いたしました。

近く設立される新たな事業体では、HAL財団がこれまで積み上げてきた仕組みをより一層強固なものにしながら、民間企業が持つ豊かな経験、ノウハウと幅広いネットワークを活かし、アグリビジネスの新たな地平を拓き、北海道農業発展の一翼を担っていきけると信じております。

私たちHAL財団としても、インキベーターの役割を果たしたものとしまして、また出資者の一員としても、その発展に全力をあげて協力していきたいと考えています。

流通開発事業を新会社に事業移行した後のHAL財団は、「非営利型」の一般財団法人として、その役割の原点を今一度踏まえ、北海道農業の「基幹産業」としての意味を深めていくために、経済基盤、農業経営のみならず、大地に根ざした個性的な暮らしのベースともなる地域創造の役割にも目を向けていきたいと考えています。

事業移行後のHAL財団は、財団本部を札幌市中央区に移転することになりますが、今まで以上に、心新たに北海道の農業農村に関わる公益的事業の展開・発展に努め、微力を尽くしてまいります。引き続き、財団事業に格別のご支援、ご理解をよろしく願っています。

北海道知事の認可を受けて、財団法

人北海道農業企業化研究所が設立されたのは、2003年(平成15年)のことです。認可日は「12月24日」でしたが、この日としたのは、未来から振り返った時、財団の設立は、北海道や北海道に住むすべての人に対する確かな「プレゼント」であったと受けとめてもらえるものでありたいと願ったからです。

財団は、「家業から地域企業へ」をコンセプトに「農業企業化研究所」と名付けられたのですが、当時は、「企業化」という言葉にほとんど理解が及ばない時代でした。そうした状況を踏まえ、英語表記をHokkaido Agricultural Laboratory for Business Developmentとし、「HAL財団」と愛称することにしました。敢えて明かせば「北海道農業に春を…」との願いを込めたネーミングでもあったのです。

創設以来、模索を重ねながら、企業視点を取り入れ経営の改善と向上に取り組み北海道農業者の取り組みをサポートし、北海道農業の一端を支えるための努力を続けてきました。

農業法人や農業者等を対象に、農業に関する政策や制度についての各種情報提供支援、地域で先駆的、独創的な農業経営を展開する農業者などを顕彰する「HAL農業賞」の創設、農業者のかかえる課題に対応するための総合的な窓口の設置運営、さらには農産物の統一的な独自認証制度の創設と農産物の流通販売などの実証実験的な活動を進めてきました。

2007年、流通開発拠点として、恵庭市に「HAL流通研究センター」を開設、2011年秋には、財団本部を空知管内の浦臼町から同センター内に移転開設しました。

これから HAL財団が 向かう先

HAL財団 専務理事 斎澤 隆



北海道にこだわり差別化を追求する。このことに果敢に挑戦してきたHAL財団は、17年間に及ぶ事業遂行において着実に社会的な評価を得てきました。

私は令和2年1月に財団専務理事に就任いたしました。つまりこの原稿を書いている時点では、2か月ほどの業務経歴となります。HAL財団が非営利型として取り組んできた、食品の安全、労働環境、環境保全に配慮した生産工程を取り入れている農業者を認証する国際規格「GLOBAL G.A.P.(GAP)」の推進、HAL認証農産物の生産・加工・流通のシステム開発、地域農業に貢献した農家を表彰するHAL農業賞は、他に類を見ないものといえるでしょう。

私はこれまで長い期間、中小企業研究を職としてきました。そこにおける研究テーマは、中小企業が持続して存続するために必要な条件を探ることです。

HAL財団が取り組んできた事業の意義をこの視点から検討できるのではないかと考えて、以下に記すこととしました。少々専門的な記述もありますが、お付き合いください。

わが国には、膨大な中小企業研究の蓄積があり、その柱の一つに中小企業の存立条件をめぐる論争があります。昭和30年代の日本は、大量生産体制に依存する高度経済成長の真っただ中でありました。この時期に行われた経済の二重構造をめぐる論争も、その一つです。当初、二重構造とは、大企業と中小企業との間に断絶ともいえるほどの規模別賃金格差が存在することを意味しました。この格差の縮小を期して、昭和38年に中小企業基本法が成立します。この法律が進めた近代化政策は、中小企業の大량生産体制を促した一方で、個性のある伝統的な地場産業を消失させる側

面もありました。

昭和36年に中村秀一郎著『中堅企業論』が出版されます。経済の二重構造が日本資本主義の遅れた構造として問題視されていたこの時期に、中村は、中小企業の枠を超えて急成長する企業の群生を実証し、これらの中小企業群を「中堅企業」と命名しました。中村秀一郎氏が紹介する事例に(株)D社があります。D社は、戦前期に顔料及び印刷インキ生産の一貫体制を確立し、戦後もいち早く再開しました。しかし、それに安住せず、合繊樹脂の成長を見越し、その着色料の開発に取り組みました。このことが、大企業からの圧力に対して対抗力をもち、中小企業の相互の過度競争からもまぬがれうる独自の企業ポジションの確立に成功したのである。

差別化の本質は、ここでいう「独自の企業ポジションの確立」にあり、そのため差別化こそ、中小企業の存立条件である、と私は考えます。

私は、北海道の企業についてこれまでに2000社以上の実態調査をしています。その中から道内の「中堅企業」二社について紹介します。

(株)F社は、明治期に札幌で味噌・醤油の醸造業を開業。戦後、それも昭和40年代に業界は大量生産の時代に入り、スーパーマーケットでの販売が主流となり、本州商品が低価格で道内市場の

過半のシェアを占めるようになりました。差別化を何に求めるか。現社長(五代目)は道産の原料・素材へのこだわりに求めました。安心・安全、地産地消。生まれたのが「日高昆布しょうゆ」です。本州への移出も本格化しています。

もう一つ取り上げたいのが水産練製品製造業者の(株)K社です。もともとこの産業は、前浜の魚に依存する典型的な地域産業です。昭和30年代後半になって、スケトウダラのすり身化技術が確立し、業界は一気に大量生産の時代に入ります。本州製品が大量に流入し、道内企業は瞬く間に駆逐されました。その時にK社は、原料に道内産のワラスカを使い、手作りりで値段は高いが品質の良いものを作る経営を目指しました。現在、東京市場では北海道ブランドの高級品としてのポジションを確立しています。

これからのHAL財団は、公益事業で新たな展開を目指していきます。「北海道にこだわり、差別化を追求する」ことが肝要だと考えています。

私が携わってきた中小企業経営研究が、北海道農業の企業化に役立つことが多々あると思っています。この経験、視座を持ち、みなさんとともに公益事業をより実業に活かせるよう事業を進めてまいりますので、従来以上にご協力をお願いいたします。

HAL BUSINESS REPORT

2019年度

「HAL流通開発事業全道研修会」
「HAL認証農産物協議会総会」を開催



2020年1月29日(水)、ホテルニューオータニイン札幌にて2019年度「HAL流通開発事業全道研修会」「HAL認証農産物協議会総会」が開催されました。

HAL認証農産物協議会総会では、HAL財団の事業体制変更に対応するため、現行の理事体制が重任されました。全道研修会では、「最近の利用動向と商品検討」と題し、生活協同組合連合会東海コープ事業連合MD改革本部生鮮統括副本部長の小早川隆様にご講演いただき、宅配事業を中心とした小売事業の実際として、販売の状況や今後の商品開発の方向性などについてお話いただきました。



北海道農業法人協会からのお知らせ

北海道農業法人協会は 一般社団法人に組織形態を 移行しました。

北海道農業法人協会(会長南和孝)は、令和2年2月21日(金)に会員総会を開き、これまでの任意団体から一般社団法人に組織を移行いたしました。

一般社団法人に伴い、農業団体としての存在感を発揮するとともに、北海道農業を担う経営体の発展・強化に貢献すべく活動を行ってまいります。引き続きよろしくお願いたします。

新・理事体制

代表理事会長	南 和孝	理事	藤城 正興
副会長	小椋 幸男		大西 智樹
副会長	島崎 美昭		東條 真澄
副会長	大塚 早苗		平賀 農
専務理事	柴田浩一郎		木村香菜子
			杉山 憲由
			菅原 謙二
			坂本 寛
			竹下 耕介
		監事	村澤 克己
			弦間 秀子

The Fellowship



member's interview

Vol.55

※フェロウシップ(fellowship)とは、仲間である事、友情、協力などを意味する言葉。HAL財団では北海道農業に携わる方々とのフェロウシップを大切に、それぞれの経験や事例を共有・意見交換することで、北海道農業の発展に貢献したいと考えています。

農業経営モデル紹介

第14回HAL農業賞 支援企業賞

株式会社いただきますカンパニー

代表取締役 井田美美子氏



農業知識を持つガイドを養成し 大規模農場での体験観光を実施

ガイドの案内で、食料生産の場としての農場景観と食を楽しむツアー「農場ピクニック」を、大規模畑作地帯である十勝で実施している株式会社いただきますカンパニー。全国でも珍しい、農業もてなしの知識を備えた「畑ガイド」を養成するシステムを構築し、受け入れ農家の負担軽減と農繁期でのツアー開催を実現しています。

2019年度は国内外から年間約2000人を集客。農業観光の新しいスタイルとして、またプロフェッショナルな人材を育成するシステムとして注目を集め、全道各地でのコンサルタントや出張講座などにも事業領域を広げています。

生産現場の魅力 観光で楽しく伝える

私は札幌の出身ですが、農業への興味から帯広畜産大学に進学。子どもの野外教育プログラムや自然体験ボランティア、農場実習などに積極的に参加してやりたいことを模索しました。その中で、生産の場である農場そのものに価値を感じるようになり、生産者の想いや風景の美しさなどを伝えるグリーンツーリズムを仕事にしたいと考え



るようになりました。22歳くらいのときです。

十勝の魅力は農業であり、そこから生み出される食です。けれど、十勝農業は経営規模が大きく、忙しい時期に人手を割いて農業の魅力を伝える観光プログラムをやるうという人はあまりいません。

農家の人たちが全てを担うのではなく、農業をよく知る地域の人たちがガイドとして案内することで、多くの方に楽しく農業を伝えることができるのではないかと。大学を卒業後、十勝の観光に関わる仕事に10年くらい携わった経験から、そういった考えが浮かびました。

一方で、私は結婚・出産しましたが、子育てと仕事の両立が非常に難しく、勤めていた会社を辞めざるを得なくなりました。子育てをしながら、自分にかできない仕事をいいバランスでやっていきたい。そう考えての起業でもありました。

雨でも雪でも実施 ありのままを見せる

現在、当社では4農場の協力で「農場ピクニック」を実施しています。菜の花が咲き始める5月から受け入れをスタートして、青い小麦畑、ジャガイモの花、もぎたてとうきび、ジャガイモ掘り、長イモ掘りと、メニューを変えなが

ら10月まで実施しています。

当社のツアーの特徴は、消費者がイメージする「農らしさ」を提供するのはなく、産業としての農業の現場のありのままの魅力を伝える内容になっていることです。台風直撃などを除き、雨や雪が降っても、私たちのほうからツアーを中止することはありません。トウモロコシの収穫も、通常は畑にすぎ込む2番果を採ってもらいます。農家さんは「せっかくだからいいものを食べてほしい」と言いますが、それは普通に購入することができるものです。いつも食べているものが選び抜かれた特別なものであることを知ったり、強風でトウモロコシが倒れていることで農業の厳しさを感じたりできる、それもガイドと現場に来るツアーでしか体験できない価値だと考えています。

一般的な農場体験ツアーの受け入れが進まない背景には、天候次第で農業の進行が変わる中で「この日」と決めて受け入れ対応を約束することが、農家さんにとってストレスになるということがあります。けれど、「お客さんを連れていくので体験させてください」ではなく、「信頼できるガイドになりますので農場内を案内させていただきます」というスタイルであれば、「いいよ」と言ってくれる農家さんは必ずいると考えていました。農業関連のセミナーや交流



会などに参加して構想を話す中で、最初の協力農家さんに出会い、その後は事業スタイルが広まることで、農場の理解や協力を得やすくなりました。

農業と地域を愛する シルバーク人材などが活躍

自然体験ガイドをしていたときの経験から、畑ガイドはボランティアではなくプロであるべきと考えました。専門的な知識と接客スキルが必要で、農場とお客様の双方に対しての責任があるからです。また、育児休暇中に働くことができない苦しさを経験したことから、畑ガイドについては退職者や子育て中の人など、さまざまな人が自分のスキルを活かして働ける場にしたとも考えました。

十勝には、生産者ではなくても自分ごととして農業を語る人がたくさんいます。農業改良普及員、農業機械や資材会社・でんぶん工場などで働いていた人や、親戚や友人が農業をやっている人たちです。畑ガイドはそういった方



たちが、知識や経験を活かしつつ観光で来た人との交流を楽しむことができている仕事です。

内閣府の起業支援金を得て法人化したのが2013年3月。畑ガイドの育成はその翌年、帯広市からの委託事業として取り組みを開始することができました。このときに作った原型を少しずつ改良して、現在の畑ガイド育成プログラムとなっています。養成講座は2年に1回、半年かけて実施しています。2019年度のガイド登録は19名です。

畑ガイドシステムの課題は、ガイドの特性を考えたお客様とのマッチングや、農場との関係を調整する事務局を担う人間の養成です。当社はいい人材に

恵まれています。畑ガイドをモデルとした他地域での取り組みのコンサルティングではこれがハードルとなっています。

新メニューを加え 事業モデルの完成を目指す

当社はツアーなどの観光事業のほか、指定管理事業やコンサルタント、講演などによる売上があります。観光事業の売上は全体の1/3強ですが、これを会社の強力な柱となるように育てたい。2015年以降、年間集客数は1500人〜2000人という状況が続いているのですが、3000〜4000人となることを目指したいと考えています。



具体策として、農場ピクニックとは切り口が異なる、運動会のような体験メニューを準備中です。麦稈ロール転がしやバター作り競争、ジャガイモ品種当てなど、大勢が一度に、楽しみながら農業に触れることができ、多様な要望にも応えることができます。チームビルディングの機会ともなるので、研修用として学校や企業から好感触を得ています。

また、2020年度は農場ピクニックの価値を改めて発信したいと考えています。当社の集客のピークは7月〜9月で圧倒的にファミリー層が多いのですが、農場ピクニックは実は、大人が参加して楽しいツアーです。写真映えるし、面白い小ネタも豊富、知識を深めたい方には専門的な内容もお伝えできます。シルバー層向けにも情報を発信していきたいですね。

2019年の春に私の活動拠点を札幌事務所に移し、十勝以外の地域に行く機会が増え、その中で農場ピクニックの価値と完成度を再確認しました。私たちの食を支えてくれている農業の現場を知って理解を深める機会、農業との絆を改めて結び直すきっかけとなり得るツアーです。他地域でも成立する事業モデルとして完成させたいと考えています。



DATA



株式会社いただきますカンパニー

所在地 / 帯広市西12条南29丁目2-5(本社)

設立 / 2013年5月20日

(個人開業は2012年3月)

資本金 / 650万円

売上 / 2,800万円(2019年度)

社員数 / 9名(正職員2名 パートタイマー7名)

事業内容 / 農村を活用した旅行商品の企画・運営・ツアーコーディネート、畑ガイドの養成・コンサルティング、食と農の発信に関わる事業など





【第15回】

HAL 農業賞表彰式を開催

2020年1月31日(金)、ANAクラウンプラザホテル札幌において、第15回HAL農業賞表彰式を開催いたしました。表彰式には、これまでの受賞者であるフェローシップメンバーの他、各業界から多くのゲストが参加し、受賞を祝福いたしました。



THE 15th AGRICULTURAL AWARD

HALだより休刊のお知らせ

巻頭に記載がありましたとおり、HAL財団の体制が今夏から大きく変化いたします。それに伴い、当財団の広報誌である『HALだより』も休刊することとなりました。2005年秋に第1号を発行して以降、財団の活動やフェローシップメンバーの皆様の活躍を季節ごとにお届けし、15年間で58号を発刊してまいりました。今まで多くの方にご愛読いただきましたことを、心から感謝申し上げます。

一般財団法人 北海道農業企業化研究所

